

**待降節・アモス書を読みつつ②**

**わたしを求めよ、**

**そして生きよ！**

アモス書 4章12 ～ 5章5節

ローマの信徒への手紙 6章4 ～ 11節

武田真治

**一、アモスという預言者**

毎年、アドベント（待降節）には旧約聖書の預言書を読みつつ、イエス様の御降誕を「待つ」思いを高めて行きたいと願っています。今年は『アモス書』を読みます。

アモスという人は、預言者や祭司の家系に生まれた人物でもなく、若い時から預言者集団の中で訓練を受けて来たという人物でもありません。一人の農夫として畑を耕し、羊を飼って生活をしていました。そのような人が、神様から召しを受け、言葉を与えられ、預言者となっていたことは、特別に正しい人であったとか、信仰が深かったということでもなければ、小さい時から靈感のようなものが強かったという訳でもなかったのです。

彼が預言者として目覚めて行ったのは、むしろ、自分の農夫としての仕事を一生懸命為していたからなのです。

先程、4章12節から読んで頂きましたがその前にはこのような言葉があります。

『刈り入れにはまだ3月もあったのにわたしはお前たちに雨を拒んだ。ある町には雨を降らせ、ほかの街には雨を降らせなかった。雨のない畑は枯れてしまった。しかし、お前たちはわたしに帰らなかったと主は言われる。わたしはお前たちを黒穂病と赤さび病で撃ち、お前たちの園とぶどう畑を枯れさせた。また、いちじくとオリーブの木はいなごが食い荒らした。しかし、お前たちはわたしに帰らなかった』と。

これらは、アモスが一生懸命働いているまさにその場所に、ひでりが続き、雨が異常な降り方をすることで作物が枯れる、或いは、次々と作物に病気が起こり、作物が育たない、また丹精込めて育てた作物もいなごに食い荒らされる、そのような「異常な状態」について彼は考え

ざるを得なくなるのです。何がこのような災いを起しているのかと。そこからアモスは、これらのことがすべて、神様が為しておられる、しかもイスラエルの民に対して『わたしに帰るよに』と敢えて起しておられる「警告」であるのだということに気付かされ、イスラエルの人々に伝えなければならないと促されて行くのです。それがアモスの預言者としての出発点でありました。そのようなアモスを神様が預言者としては用いて行かれたということなのです。

私は、アモスが自らの務めを一所懸命果たしていたからこそ「神様の警告」を正しく受け止められたという点にとっても大事な教え、真実が見て取れるように思います。自分が預言者になるのだとか、自分が神の言葉を取り継ぐ者になるのだということが最初にあるのではなく、自らの状況や現実在必死になって取り組んでいく、そのただ中でこそ、神様の示しやみ言葉を与えられて行くということなのではないでしょうか？それは牧師や教師だけに關する事ではなく、私たちすべての者に今も通じることであるように思います。

## 二、お前は自分の神と会う備えをせよ

そのようにして預言者として立たせられて行ったアモスが、神様らかの警告に目も心も留めることをしないで神様に『帰ろうとしない』イスラエルの民に向かって、神様から預かった言葉が今日の箇所です。

即ち『それゆえ、イスラエルよ、わたしはお前にこのようにする。わたしがこのことを行うゆえに、イスラエルよ、お前は自分の神と出会う備えをせよ。』です。

このみ言葉の意味は、以上のように何度も神様が警告を為されたにもかかわらず、いっこうにイスラエルの民は悔い改めて主なる神様に『帰ろうとしない』が故に、今度は、神様の方からイスラエルの民の方へと出て行かれると言われているのです。だから、その来られる神様と『出会う備え』をせざるを得なくなるのだと語られているのです。まさに「預言」の言葉です。

アモスの時代に於いては、ここでの神様が来られるということはまさにイスラエルの民に対する「裁き」が起こるということを意味していました。実際に、このアモスの預言の通りに、まもなく北イスラエル王国は外国アッシリアの襲来によって滅ぼされていくことになりました。

しかし私たち新約聖書以降に生きる者にとっては、このアモスの預言の言葉はまさに「イエス様のご降誕」を表す言葉そのものではないでしょうか？自らの罪の故に神様に立ち戻れない

でいた私たちに対して神様の方から救いを与えて下さった、神様の方から私たちの側に来て下さった、それこそがクリスマスの出来事の意味です。

あのマタイによる福音書 1 章 21 節以下の『この子は自分の民を罪から救うからである。このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。』という言葉そのものではないでしょうか？

従って、その神様の到来は、旧約のような「裁き」ではもはやなく「救い」として私たちに起こった出来事なのでした。

そして今の私たちにとっては、この礼拝こそが主と出会える時となっています。イエス様が『二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである』と約束して下さっているように。

それ故、今日のアモスの言葉から、今も問われていることは『お前は自分の神と出会う備え』をしているかどうかという点ではないでしょうか？今、礼拝に出ているこの時に「神様と出会う」という思いを持ってここにいるかということです。

### 三、神と会う備えとは？

昔は、礼拝に出る時には、出来る限りの正装をして出席したものでした。勿論、それが単に形式に陥ってしまったり、礼拝がお上品な場所と誤解を受けてしまったりした弊害もあったのですが、そこに表されていた思いは「神の前に出る・神様と会う」ために身を正すという思いであったのでしょう。その思いはちゃんと継承して行きたいと思います。

そして何よりここで「神様と出会う備え」として為すべきことは、この後に続けてアモスが語っている言葉に示されています。即ち『見よ、神は山々を造り、風を創造し、その計画を人に告げ、暗闇を変えて曙とし』です。神様が私たちと出会うことのは私たちに『その計画を告げ』て下さるためだと言われているのです。礼拝のこの時に、神様が私たち一人一人にどのようなご計画を持っておられるかを示そうとして下さっていると言うのです。この点はとても大事なことのようには思います。

私たちが礼拝に於いて祈ることは、自分の願いであり、自らの求めです。そのほとんどは、自分のこれからの歩みや予定に対して神様の祝福や守りを求めることです。しかし、それはま

ず「自分の計画」があってそれに対して神様のご加護や導きを求めることではないでしょうか？そうではなくてアモスから示されていることはまず「神様のご計画」を求めよということです。それが神様との出会いを「備える心」だと。

言いかえれば、この礼拝で何より始めに為すべきことは「主よ、語ってください」「主よ、教えて下さい」という祈りではないかということです。自分の考えや思いを神様に吐露することはその後ではないかと。まず、神様の自分へのご計画や導き、即ち、神様が自分に何を望んでおられるのか？何をさせようとしておられるのか？を静まって「聴く」ことではないかと。

その通りだと思わされます。私自身、あせってまでして自分の願いを祈るのです。身を正し、静まって神様の願いを聴くことをしていないと本当に悔い改めます。

#### 四、神様のご計画

アモスは、その神様のご計画として『まことに、主はイスラエルの人にこう言われる。わたしを求めよ、そして生きよ。』という言葉を取り継いでくれています。それがご計画の底に流れている神様の思いだと。

『わたしを求めよ。そして生きよ。』という言葉は素晴らしい励ましに満ちています。同時に、私たちに対する神様のまなざし、神様の思いを知ることの出来る言葉です。神様が私たちに求めておられることは何より「生きる」ことだと。生き生きと生きれるようにと神様は導こうとして下さるのであり、そのように生きる私たちの姿を喜んで下さるのだと示しています。そしてその為にこそ『わたしを求めよ』と言われておられるのです。即ち、神様を求めて信じることが目的ではなく、私たちが生き生きと「生きる」ために必要な手段だと言われているのです。生きる為に信じるということを私たちは忘れてはいけません。

ローマの信徒への手紙六章四節に『わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです』とあるように。

(説教より抜粋)